

三井文庫に寄せる期待

麻 島 昭 一

三井文庫が財団法人として発足してから、昨年で創立二〇周年を迎えたという。正直のところ私が三井文庫に関心を深めたのは近年のことである。私事にわたり恐縮であるが、いつのことであつたか、ゼミの恩師故柳川昇先生宅を訪れたとき、先生が三井文庫の館長をされていることを知った。その時は大して気にとめず、東大定年退職後弘前大学に在籍されながら東京で館長を兼任されるとは、いつまでたっても先生は忙しい方だ、という位の印象だったと記憶する。ずっと後年になって、みずからの研究の必要上、三井文庫の意義を知り、先生が初代館長であつたことを思い出し、先生は三井文庫をそれなりに評価し、尽力されたのだ、ということをやっと了解できた。当時の私はすでに金融史研究を手がけており、三井系というべき金融経済研究所にはよく出入りし、『金融経済』にはしばしば投稿する関係にあつたが、三井文庫とはまったく無縁であつた。近年になって財閥史に深く傾斜することになり、住友財閥研究を基礎としながら、三井や三菱にも多大な関心を抱き、大変遅蒔きながら、三井文庫を高く評価するにいたつた私のことを、柳川先

生はさぞかし苦笑されているにちがいない。つまり私は、「二〇周年に寄せて」のお誘いに乗るだけの資格がないといふべきであろう。にもかかわらず結局、勝手なことを先生の思い出と共に書かせていただく道を選ぶことになった。

三井文庫の発足は昭和四〇年五月で、すでに二〇年を経過したが、筆者の所属する経営史学会も三九年一月に発足して二〇年をこえた。企業史料なしには成立しえない経営史学会と、個別企業資料の集積ともいふべき三井文庫の発足がほぼ同時期であったということは、結果的かも知れないが、きわめて暗示的に思える。経営史学会が当時の経済史研究の動向にあきたらず、既存の経済史関係の学会とは別建に発足したことは、ある意味では革新的(?)行動であつたらう。三井文庫が所蔵史料を学術的研究に供し、その成果を公表することを目的にかかげて発足したことは、当時のみならず現在にいたるまで、類例が乏しいという意味で、これまた革新的(?)であつたと思われる。たとえば旧四大財閥をみても、正直のところ三菱では最近営利的研究所体制に深く傾斜し、その裏返しとしてか企業史料の保存・研究・公開に遅れをみせ、住友では住友修史室が住友家・本社史作成を旨とし、豊富と推察される内部史料を擁しながら公開性が薄く、安田については史料の集中保管・公開体制の話はまったく聞いていない。筆者のごとく財閥の比較研究を志す者にとっては、旧財閥の史料保存・公開度の違いに途惑いを感じ、利用可能性の拡大を切に期待している。その中であつて、三井文庫がその先頭を切つて、われわれの期待に大きく応えてくれた事実、そして数多くのすぐれた研究成果を生んだ事実をまず高く評価したい。

いうまでもなくその差は、旧財閥の流れを引く各グループの体質に係り、また、トップの企業史料に対する姿勢を反映しているにちがいない。このような差を生ずること自体、経営史の立場からいえば研究に値することかも知れない。三井文庫の所蔵史料が近世の三井家事業から明治期以降におよぶ膨大な量であることは、一つには三井家の歴史の長さに関係するが、なんといつても旧三井文庫時代からの長年にわたる史料の蒐集・保存努力の賜にほかならない。この

点は簡単に真似しようとしても出来るものではない。しかし別言すれば、歴大な史料の大部分は、現三井文庫が蒐集したというよりは、旧三井文庫時代の遺産の継承ではなからうか。もちろん文庫の基本的使命が継承史料の保存・利用・公開であれば、文庫所属研究員の研究活動のほか、史料整理、管理・補修、閲覧事務だけでも多大な労力を要することはよくわかる。限られた労力を前提とすれば、それだけで手一杯ということになるかも知れない。

にもかかわらず、われわれの三井文庫に対する期待は大きく、つい幻想を抱いてしまう。すなわち、「三井文庫に行けば三井に関するものはなんでもあるにちがいない」と。もちろんこれは三井文庫の内実を知らない者が抱く誤解であるが、三井文庫の知名度が高くなればなるほど期待感も強くなる。現に筆者も三井文庫ならあるだろうと期待して行って、目的を果さなかった経験がある。私の場合は、三井系企業の戦前の考課状、株主名簿、職員名簿の類であった。これらは企業にとって基本的な資料であり、簡単にみられそうなものだが、現実には公共図書館や大学等でも戦前のものは完全な形では得られない。そこで三井系の企業なら三井文庫、三菱系ならば三菱経済研究所（ないし三菱総合研究所）、住友系ならば住友修史室にあるだろう、という発想についてしまいが、現実を訪れてみるとなくて失望する。もし私以外にもそう期待するのが一般的であるならば、このことは提案に値する問題となろう。

私の三井文庫に寄せる期待は、そろそろこの辺で過去の遺産を守るといふ姿勢から前進して、積極的に「三井家なし三井財閥に関する史料センター」になっていただけでないかということである。それは三井に関する歴史的研究のための素材を集積することを意味する。やや具体的に希望を述べよう。

第一に、当面、三井系企業に関する基本的資料（前述の考課状等を含む）の蒐集である。当該企業および旧在職者等へ照会、調査、そして入手である。これは三井文庫に在籍の研究員諸氏にとっても必要なことではあるまいか。そして外部のわれわれ研究者にとっても、この基本的資料が整備されることは実に裨益するところが大きいにちがいない。

第二に、大正・昭和期についての三井系企業の内部資料の積極的引受である。一般的にいえば、いまや企業史料は社内効率化の犠牲となって廃棄ないし散逸の危険にさらされている。よほど企業側に企業史料についての理解がない限り、永久的保存は期待薄である。三井文庫が立派な遺産を保有するのは、先人のすぐれた識見と努力があつたればこそであるが、今、われわれの世代が努力しなければ近現代の企業史料を次の時代に引渡すことはできない。そして企業の方も累増する史料の引取り手、つまり受皿を求めているのではあるまいか。三井文庫はすでに受皿としての信用も高く、その資格を備えているように思われる。史料は努力なくしては入手できない、これが実証研究をしている者の実感である。

第三に、三井文庫が三井研究の成果発表の場を外部にも提供することである。『三井文庫論叢』をみると、所属研究員以外の論文が掲載された実例がすでにある。したがって開放済みかも知れないが、私のいいたいのはこうである。『三井文庫論叢』が三井研究の成果発表の中心的存在になることである。三井文庫所蔵史料を使用しての研究が、通常の場合、掲載の対象であろうが、仮りに使用の程度がすくなくとも、三井に関するすぐれた研究であれば、発表の場を提供してはどうか。『三井文庫論叢』が三井研究のメッカという認識が成立すれば、同誌に掲載されることは三井研究者の目に必ずふれることを意味し、また、同誌をみることは研究を志すこともできなくなるだろう。投稿論文の掲載可否が、三井文庫側の選択に待つのはいうまでもない。欲をいえば、『三井文庫論叢』に一定期間ごとに三井研究のサブページを掲載すれば一層よい。とにかく三井に関する史料集積の場と、研究成果公表の場と、この二つを兼ねるとき、三井文庫は文字通り三井研究の最大かつ十分な拠点となり、この種機関の最良のモデルとなるにちがいない。

以上は、外野からの虫のよい期待である。しかし重ねていうが、三井文庫の存在を高く評価するが故の夢である。現実には厳しく、夢のまた夢に終らなければよいが、三井文庫のますますの発展を祈る次第である。